

市民の声

生涯学習市民開放プログラムを受講して

藤原 武治

2008年1月7日。曇天ではあるが、雪や雨の降る気配はない。これならば自転車で行けるぞと玄関を出るが、小寒のこの時期、さすがに冷えきっている。意を決してペダルを踏み出すと、寒風はそのうち心地よさになった。

思えば、32歳になる年、それまでのサラリーマン生活を辞めて小さな会社を起して以来、昨年4月会社を閉じるまでの34年間、私は家族の生活と会社の経営を守るため、ただひたすら商売ひとすじの道を歩んで来た。

そして、会社解散を決意した2006年のふとした折に目に入ったのが、「福井大学生涯学習市民開放プログラム」の記事である。

僕はこれまでいったい何をしてきたのか。生活のため懸命に仕事に取り組んできた自分にはそれなりの自負はある。でもそれだけなのか。そんなこんなが脳裡を駆け巡り、私は居ても立ってもいられない気持ちでいっぱいになったのである。

かくして私は2007年度前期から3科目を受講することになるのであるが、各科目の初講義を受けての第一印象は、それこそ「目からうろこ」の連続である。専門の先生が長年の研究成果を惜しげもなく私達に教えてくださる、そしてその切り口の鋭さと奥の深さにはただ感服するばかりであった。

中でも、松浦義則先生の日本史（後期）では、地元福井県の中世社会が学べたのは嬉しかった。時間があれば、発掘整備が進んでいる平泉寺六千坊跡はもう一度ゆっくり訪ねたいし、その昔栄えた小浜へも足を伸ばしたいと思っている。

今年、私は越野格先生の「山川登美子の短歌」に挑戦を始めた。万葉集とはいかないが、難解な明治歌人の真髄に迫るのも大きな楽しみである。そして何よりも、小浜市が輩出した偉大な文人の人となりを探るのも意義深いことであろう。

私はこの先何年続けられるか分からないが、干天に慈雨の如く私を生き返らせてくれたこの福井大学でもっともっと栄養分を吸収したい。そして願わくは、あの世とやらでエンマ大王に拝謁できたならば、その大前で「私なりの卒論」を朗々と発表したいと思っている。当然の事ながら、お世話になった先生方のことを逐一報告するのも忘れはしないつもりだ。

謝々